

梅 うめ 和名に、萬葉第五に家持の父大納言旅人卿太宰帥なりし時、家に三十二人集會して、梅の歌をよみ、追加の歌もあるに三十首は鳥梅とかけり、是やがて梅の吳音を轉じて假名に用たり、此時は只音にて、字に付て梅の義有に非ず、やなぎを楊奈疑と書るに同じ、其外は宇米汙米、宇梅、有米、于梅などかけり、牟梅とかける歌一首あれども、異本には宇梅とあれば、他に例するに然るべし、第八第十第十七より廿迄にもおほけれど餘りなれば出さず、古今集物名に、うめを題にて、あなうめにつねなるべくも見えぬかなこひしかるべき香はにほひつゝ、順家集にも、西四條宮源中納言のもとにて、うもじを給はりてとて、梅津川このくれよりぞながれてのうれしきせばは見えむみなそこ、かやうにむかしは皆うめとのみ書けるを、中頃より音便の無に近ければにやあらん、むめとのみ書て、今の世はうめとかく人なし、然ども昔を志たふ人は、かよはして書べき也、

〔南留別志二〕梅をうめ、馬をうまといふ皆音なり、うは發聲なり、日本紀の中に、梅をめのかな馬をまのかなに用ひたるも、此いはれなり、

〔権園隨筆下〕梅の假字

梅の假字、万葉集にてはまさしくうめなれど、古今集貫之主の自筆の本といふに、むめとあれば、古今集已後の假字には、むと書方よろしとて用る人あり、おのれいまだ其自筆の本といふものは見ざれども、古今集物名に、梅あなうめにつねなるべくも見えぬかなこひしかるべき香はにほひつゝとあり、これはあな憂といひかけたれば、貫之主もうの方を用られたりと見ゆ、これも高鞆説也、

〔新撰六帖六〕むめ

日數まつ春ををそしと白雪の下より匂ふ梅のはつ花